

第4回

武蔵野市生きる力を育む幼児教育振興検討会議

日時：令和3年7月12日（月）

午後6時から午後7時30分まで

方法：オンライン会議

出席者：＜委員＞河邊委員、今福委員、加藤委員、平川委員、松井委員、

勝又子ども家庭部長、村松指導課長、

＜市・事務局＞吉田子ども育成課長、事務局2名

座長発言□、委員発言■、事務局発言○

開 会

【事務局より、配付資料について説明】

1. 視察の報告

○ 視察につきましては、6月末から7月初めにかけて実施しました。

【事務局より、視察について報告】

■ 子どもが主体というふうに先生たちがしっかりと気持ちを持っているので、子どもがどういうふうを考えているとか、どういうふうに動けるのかとか、その意図をうまく、答えを先に出すということではなくて、それを先生たちがしっかりと受け止めて、子どもたちへのアドバイスというか、声がけになっているのだなというのをすごく感じました。

もちろん、子どものことについて書くのもいいかなとは思いますが、先生たちが子どもに対しての向き合い方も何かあるといいのかなと思いました。

■ 研究、研修、実践で、日々の保育で何が大事なかを共有しながら保育を進めているというところが伝わるように書くといいかなと思いました。

■ 5歳のクラスは4つぐらいの目当てを自分たちのクラスで決めて、子どもたちが川を作ったり、お化けが出てくるような建物を作ったりする活動を見させていただきました。自分たちの中で、今日はこれをやって遊ぶということをしっかり目的として持って、活動を自分たちで進めているという姿を見ることができて、今のまとめの中にも、「先生がやることを示すのではなく」というふうに入っているのですけれども、5歳になったら、協同的な目的を持って進めていて、4歳は、生活もまだ協同では難しいから、一人ずつでも作れるようなものを用意して作っているというようなお話も伺って、子どもたちの発達に合わせた個々の活動から協同の活動へつなげていくというようなところが、視察を通して、分かりやすい姿として見せていただきました。そういうような内容を幼児教育の特徴というか、大事なこととして、入ったらいいいのかなと感じました。

□ 発達に応じた環境の工夫が、積み上がっていているということを実感しました。5歳児になると、学級の全体の目的に向けて、小グループが活動の目当てをそれぞれ持ちながら、協同的な活動を進めることができていると感じました。

■ 保育園の方、幼稚園の方に報告書を見ていただいて、これを基に「ああ、ここが大事なな」というところを感じていただくには、ポイントをまとめた場所をつくったほうがいいと思います。

■ 保育園に伺って、まず感じたことは非常に落ち着いた環境が用意されているということでした。子どもたちが穏やかに暮らせる、そういう何か醸し出しているものは、生きる力の土台になっていると思いました。

■ ひとつ間違えると、学校的な環境をつくってしまいがちですが、子どもが伸びるための穏やかな時間、あるいは穏やかな場のつくり方というのは、きちっと押さえておきたいと思いました。

□ この協力園が、生きる力を育む保育、幼児教育で大事にしていることというようなことを最初にして、特に園の特徴的なもの、そしてその園の資質、質を向上させるために何かなさっていること、保育者同士の話し合いとか、この3つくらいで流れを考えてみましょうか。

○ 検討してみたいと思います。

■ この報告書ができたときに、保育者や保育や教育に当たる方たちが、共通して何が大事かというのをポイントとして出すかが大事だと思います。幼稚園の教育の部分と時間のやり方とかもあるでしょうし、保育園の中の長い生活の中で、どの部分でこれを出していくのかということについて、見る人によって、保育園だからとか幼稚園だからという目で見えていただきたくないので、少し工夫が必要だと思います。

■ 幼児教育に大事なことは、子どもたちの探求的な動きは、全ての年齢で出てくるはずなので、それに応答的にどう捉えるかということだと思います。子どもが人としてちゃんと生きているということを保育者はきちんと向かい合わなくてはいけなくて、その子どもが何を学んで、何を求めているのかという幼児理解、乳児理解から始まる保育というのが、一番大事なところだと思います。

赤ちゃんの部屋で午睡のところを見て、生きていることの大事さというのは、先生たちの細かなチェックから感じました。

■ 本当に静かな環境で、各部屋で、それぞれの月齢のお子さんが、保育者に見守られな

がら、伸び伸びというか、それぞれ探求、絵を描いていたり、何か遊具というか、物で遊んでいたり、それぞれの思うままに探求、探索をしていました。

そういう姿を保育者が目の届く範囲で、しっかり見守っているという環境がありましたので、それぞれを尊重しながら、生きる力を育てている様子が見られたなど感じました。静かな環境や、保育者と保育者の信頼感というか、安心して乳幼児が過ごしているという環境が土台となって、さらに探索、それぞれしていたというところで、生きる力の土台を感じる光景でした。

■ アルバムなどを見せていただいて、動物をたくさん飼うなど、生き物に触れるという機会を大事にされているということを感じました。馬を飼っていたというお話も伺ったりして、そういう生命に触れるような機会の大事さというのを感じました。

また、全天候型で園庭に出られるようになっていて、雨が降っても、外に出られていいなど思いました。空間をできる限りたくさん使って、子どもたちが外に出て遊べるような環境というのも、すてきだなと思いました。

□ 最初、保育所がこうとか、こども園はこうとか、幼稚園はこうとか、1日の流れの例みたいなのが出ていました。しかし幼稚園の中でも全然異なるので、何かそれぞれの特徴があるけれども、武蔵野市は、共通してこのことを大事にしていますというのは、書いたほうがいいのかもかもしれません。

保育所の場合は、1日の生活時間が長いから、そこは生活の場であるということを重視して、1日が組み立てられますとか、幼稚園の場合は、子どもが遊ぶということに焦点を当てた時間帯を中心に回っていくので、環境の構成の仕方が全然違っていたり、こども園の場合は、多様な子どもが通ってくるという複雑な時間の配分があります。

■ こども園は、例えば外の使い方も、保育時間が長い子どもにとっては、刺激がたくさんあるということが、逆にマイナスになるということもあります。しかし、1号児にとっては、限られた時間の中で、刺激を受けながら、自分の世界を広げてほしいという願いがあります。そうすると、1号の子たちに望む環境と、2号の子どもたちに望む環境が、少し違うと感ずます。

ただ、保育時間が長い子ども、午前中、一緒に過ごす時間には刺激を受けて生活し、例えば午後は落ち着いた環境の中で過ごすといった、メリハリのある1日のつくりができればいいと思っています。

□ そういうそれぞれの園の特徴みたいなものをどこかにうまく出せるといいと思います。

あとは安心感、自己肯定感とか他者への信頼感を乳児期からずっと育てていくということや、乳児期から知的な好奇心が見られていて、乳児期の探索的な行動は大事にしていくということも押さえるけれども、乳児期から幼児前期と、幼児後期から小学校に入るまでの間はだいぶ違うと思うので、そこの特徴ははっきり出したほうがいいと思います。

それでは、こども園の視察のことについて御意見いただいて、素案のほうに行きたいと思います。

■ 外遊びができなくて、十分に体を動かすことができないという梅雨の時期は、本当に先生たちも大変な時期を迎えます。こども園では廊下のコーナーを使ったり、跳び箱を出したり、マットでお山つくったり工夫して、子どもたちがいろいろなことにチャレンジしたり、覚えたりするということができているなというふうに感じました。

□ 子どもに必要な体験がちゃんと保障できるような環境の工夫がすばらしかったです。ちょうど七夕のことをやっていたので、季節の行事とか文化に子どもたちが自然に触れられるような環境の工夫があって、年齢に応じて、小さい人たちは小さい人たちにやっていた。大きい人たちも大きい人たちに、ちょっと難しいものに挑戦したりして、うまく季節の行事を取り込みながら、子どもたちの発達に応じた経験が積み重なっているなと感じました。

■ 0歳児から2歳児の子たちも、安心した落ち着いた環境が用意されているなと感じました。外に出やすいという環境も用意されていて、中でも外でも安心して遊べる環境が用意されていると感じました。

室内だったのですけれども、0歳児から2歳児の方も、それ以上の方も、遊具とか跳び箱なども用意されていて、跳び箱の様子は見ることができましたけれども、体を使った遊びがしっかりとできていると感じました。

■ それぞれの一生懸命な取組の中で、子どもが伸びていくことは重要視していきたいと考えています。私立幼稚園も保育園も多様だと思いますけれども、お互いに受け入れ合いながら、その中の大事さということもきちっと受け止めて、共通理解も図られていくことが望ましいと思います。保育の中にも当然、一定の私たちの指導の枠というのがあり、その枠を自由にコントロールできるというところが、また幼児教育の醍醐味だと思います。そこが幼児期に大事な、枠を大きくしたり狭くしたり、子どもがぐっと集中できるような枠にしてあげたりとか、広い枠の中でも、ここが集中できたりとか友達とつながったりというような辺りは、一つポイントだと思いました。以前教えてくださった「ここで悩ませ

ていたら時間ももったいないじゃない。ここは教えて飛ばしていいじゃない。その次にもっと面白い壁があるから」というような、足場をどこにかけるかとか、その辺の先生たちの入り方って、すごく大事だと思ったところです。

2. 中間報告書の素案について

○ 素案について概要を説明します。

この素案は、本検討会議でご議論いただいた内容、アンケートや視察の結果を踏まえたものです。この素案が、本検討会議で中間報告書として固まりましたら、パブリックコメントを実施して、その内容を委員の皆様にご議論いただいた上で、最終報告書として取りまとめるという流れを想定しています。

【素案の内容について事務局から説明】

□ 中間報告がどういう位置づけになって、最後の報告につながるか、イメージができていないのですが、私たちは6回の議論を通して、武蔵野市の子どもたちに生きる力をこのように育みたいと提案したいと思えますということを書き、それが、乳児期からの安心安全で、それから小学校のことを見据えたときに、自信を持って、意欲を持って生活できる子どもを育てたいと思っているというように続きます。それを実践するために課題が2つあり、1つは、横のつながりと縦の具体的なつながりです。このことは、これから武蔵野市として考えていかなければならないというふうにきたほうが、説得力があると思えます。

「私たちは生きる力をこう考えます」というのが最初のタイトルです。これまでも武蔵野市ではこのように押さえてきましたというのが、この5ページ目のところです。そして、話合いを通して乳児期から幼児期に、幼児期から幼児後期について、こんなことが大事だというふうに考えますというのが来て、協力園の視察を通して、特にそのことが印象づけられましたというふうに来て、では、そのためにどうしたらいいのかという課題が来ます。

■ 今までの計画があって、実態の把握があって、目指す狙いが乗っかり、そこに課題が生まれてくるというのは、自然な考え方だと思います。

□ アンケートをお願いした委員の方たちも、自分たちが答えたアンケートが、どういふふうにかかされているのか、多分、注目されると思うので、そのアンケートをどうするか

ということもご議論ください。

■ 今、お話があったように、5ページ辺りについては、今、進めている第六期長期計画や第五次子どもプランで、「生きる力」というのを出してきたというところなので、これまでというよりは、これからこうしたいというところの市の姿勢だと思います。生きる力とは何なのかというところから今回、このアンケートをとって、またさらに視察をして、それぞれの園の取組について考えて、方向性という点から方向性を導き出しているというところだと思いますので、流れとしては今、委員の皆様がお話しされたところで再構成されるのがいいかと思います。最終的に、課題出しだけではなくて、課題に対するこの会議としての提案というのは、この方向性として出てくるのかと思いました。

■ これからつなげる小学校の先生に、武蔵野市の考える幼児期の生きる力の育み、どういうふうに育んでいくのかというところは、しっかり分かっていたきたいので、一番初めに持っていくというところは、ポイントだと思います。

■ 7ページ、8ページ目のところで、「遊びの中で」というところが強調されていますが、活動に関して、お互いの意見を認めながら話して、活動を主体的に決めていくという様子が見えていたので、遊びに限らず活動なども話合いながら、子どもたちが自主的に考えていくというところを入れると、より小学校とのつながりも見えてくると思いました。

□ 遊びと活動の定義は、どうお考えですか。

■ 遊びは、自由保育というか、そのようなところでの遊びで、活動は運動会や造形展などでしょうか。

□ 多分、一般的にそういうふうに思われると思います。遊びは重要な学習であるというけれども、遊びと聞いただけで、一般的には好き勝手に遊んでいると思われています。

■ 遊びという言葉だけだと、具体的なイメージができないかと思いました。

□ 遊びというのは、子どもの内的状態を示す言葉だと思います。集中して自分がやりたいと思ったことを単発で終わらせずに、次々と遊びの課題をつないでいく状態です。結果として、物との関わりも深まるし、人との関わりも深まります。そういう内的な状態を「遊び」といいます。それを外側から見ると、あるまとまりを持ったときに「活動」というふうに見えるのです。しかし、一般的にそういうことを言っても、なかなか難しいので、「遊びや活動」というふうに並列している報告書も見られます。

■ 「探求」というキーワードは盛り込むべきだと思います。試行錯誤して集中して没頭している状況というのは、探求状態に入っているわけで、そういった意味では小学校、中

学校、高校の探求と同じ働きを子どもはやっています。

□ 『ライフロング・キンダーガートン』という本を見ると、マサチューセッツ工科大学の先生が書いた本に4つのPが大事であると書いてあって、1つはプレイ (Play) 、遊びです。もう一つがピアーズ (Pears) 、仲間です。もう一つがパッション (Passion) 、情熱、意欲です。もう一つがプロジェクト (Project) 、活動です。プレイとプロジェクト、つまり遊びと活動というのは切り分けて、別のものとされています。プロジェクトをピアーズとパッションを持って進めていくときに、プレイという状態が大事だといっています。好き勝手にやっているものが遊びで、先生から提案されて、これをやったほうがいいよといっているものは、活動ではありません。

■ 子どもの姿からは分かりやすいですが、言語化しようとする、難しい課題になって見えてしまいます。この高度なことを幼稚園や保育園の先生はやっているのだと思います。

□ 8ページの図の中には、「探求」が入ったほうがいかなどいって、「充実した生活・遊び」の中に「探求」という言葉を入れてもらいました。

■ アウトカムとしての育ちの姿というのは、どうでしょうか。

■ 小学校としては、こういう10の姿があって、それが「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」につながっていくというようなシナリオになると思いますが、8ページの図で、幼児教育から上につなげていっていいのか気になっています。

しかし、貫きたいのは自己肯定感、安心感、他者への信頼感が、この生きる力を育むというところに、うまくスライドしていくのが理想的です。

■ 10の姿を書くときに、小学校の先生方に分かりにくいのは、10の姿を無理やり出させるのではなく、幼稚園の生活を通して、自然に表れてくるということです。

□ 到達の目標ではないけれども、しっかりと充実した幼児期、乳幼児期を過ごしてくると、やっぱり自己肯定感が育まれて、他者との関わりにも喜びを見出すことができ、興味関心があるものを探求していく力がつく。それを分解して述べるならば、この10個の姿になりますということです。

■ 10の姿が読み取ることができる事例を出すことはできます。

□ 報告書の中に、事例を入れてもいいですか。

○ 報告書としても理解は深まると思いますので、そういうのがあれば、ぜひご提案をいただければと思います。

□ 小学校時は自覚的な学びで、幼児期はその前の学びというふうに文科省では押さえています。遊びや活動という総合的な体験の中に、発達、夢中の経験を積み重ねていくということです。遊びの中では、体験が一回の体験で終わるということもあります。学びというのは、体験が積み重なって、あるまとまりをもって、その人の思考や行動に恒常的な変化が表れたときに学びというので、それは体験ではなくて、経験といいます。

■ 今回、10の姿というところでは、それをうまく保育の中に取り入れるということは難しく捉えられているという現状があります。それは何かというと、10の姿の一つ一つに説明が長く書かれていて、文章としては、たくさんいろいろなことを書かれていますが、それを学校に上がるまで、幼児期の終わる時期までにというところを踏まえて考えると、到達目標ではないというふうには言っているけれども、保育所の先生たちには、そこはあまり納得がいかないという方がいます。

もちろん、学校側につなげていくというふうに考えると、10の姿というのは、つながって考えるべきものであるというのは分かりますが、最終的に作り上げたものの中に10の姿について載せていいのか迷うところです。

閉 会